

国語教育学における研究的創造の論理

埼玉大学 戸田 功

1、研究の原方向性

すべての創造は歴史的である。同様に、すべての研究はパラダイムとしての性格を持つ。言い換えれば、先行するパラダイムを検討し、新たなパラダイムを創造することで、研究はその歴史を形成するのである。従って、研究が研究でありさえすれば、先行するパラダイムは既に検討されていることになる。パラダイムの検討と無縁な「研究」は、研究自体とも無縁にならざるを得ないからである。つまり、国語教育研究におけるパラダイムの検討とは、国語教育研究が研究であるための必要条件なのである。

そこでまず、研究というものの基本的なあり方について考えてみたい。

2、国語教育研究の場

ところで、国語教育研究における研究パラダイムの検討と言う場合、国語教育研究が国語教育研究であるための条件を問題にしているとも考えることも可能である。簡単に言うと、それは何をもって国語教育研究と見做すかという問題である。より現実的に言えば、個々の国語教育研究が参与・交流する場をどのように設定するかという問題となる。

そこで2では、国語教育研究が展開される場について考えてみたい。

3、新たなパラダイムの創造

以上、前者においては「研究」であるための、後者においては「国語教育の」研究であるための原則を明らかにしようとするものである。これらの原則に基づくことによって、個々の研究を「国語教育研究」として成立させることが可能になる。その際、旧来のパラダイムを検討し、その上で新たなパラダイムを自ら創造することが、研究者にとって必須の過程となるであろう。

そこで最後に、その過程について、具体的な例を手掛りに考えてみたい。